

利瑪竇の世界地圖に就いて

鮎澤 信太郎

要 目

一、はしがき 二、利瑪竇世界圖刊行の次第 三、利氏世界圖と其の特徴 四、利氏世界圖の影響 五、結語

一、はしがき

明末清初、多くの耶蘇會士が支那に來て耶蘇教を弘布する手段として、泰西の諸科學を紹介したことは有名なことである。こゝに見る利瑪竇の世界圖は最初にかゝる布教方法の模範を示したものである。従つて、利瑪竇の世界圖に就いては既に左の如き諸先生の研究が發表せられてゐる。

○青楓生氏 利瑪竇の地圖に就いて簡略なる説明（歴史地理 七ノ一二）

○和田清氏 利瑪竇の坤輿萬國全圖に就いて（東洋學報八ノ

利瑪竇の世界地圖に就いて

1)

○小川琢治氏 利瑪竇の「萬國全圖」と「幾何原本」に就て（史林六ノ二）

○藤田元春氏 利瑪竇の坤輿萬國全圖に就いて（地球一五ノ二・三）

○J. F. Baddeley : Father Matteo Ricci's Chinese World-Maps, 1584—1608. (The Geographical Journal, Oct. 1917)

○E. Heawood : The Relationships of the Ricci Maps. (The Geographical Journal, Oct. 1917)

○Lionel Giles : Translation from Chinese World Maps of Father Ricci. (The Geographical Journal, Nov. 1918)

○洪煥蓮氏 考利瑪竇の世界地圖（禹貢五ノ三・四合期）

○陳觀勝氏 利瑪竇對中國地理學之貢獻及其影響（禹貢五ノ三・四合期）

右の外に支那に二・三の論文（筆者未見）があ

り、更に單行本、關係論文等にて利氏世界圖に言及されたものは枚舉にいとまない程である。

それにも拘らず、筆者の淺學を以て此の小論を草する所以は筆者が昭和八年に發表した「利瑪竇の世界圖に關する歴史的硏究」(地理學硏究一〇ノ二・三・四)並に此れと同題目にて、其の梗概を日本大學文學科硏究年報第一輯(昭和十年)に述べたものに在る誤りの訂正と調査の不足とを補ひ且つ先輩諸學者の所論の補遺にもなれりと考へたからである。

猶、こゝに見ようとする世界圖の原著者利瑪竇に就いては既に夙く我國でも左の如き雄篇があるから參照せられたい。

○阿部秀助氏 利瑪竇(史學界五ノ二・一〇)

○中山久四郎氏 利瑪竇傳正・續(歴史地理二六ノ三・四及二九ノ三・五及三〇ノ一)

二、利瑪竇世界圖刊行の次第

西曆一六〇二年版利氏世界圖(京都帝國大學(宮城縣立圖書館藏)の利瑪竇の序文中に「浮槎西來、壬午(一五八二年)解纜東粵。粵人士請圖所過諸國以垂不朽。彼時竇未熟漢語、雖出所携圖冊與其積歲札記繅繹刻梓。然司賓所譯奚免無謬。」云々とあり、又明末支那に居た伊太利の耶穌會士艾儒略の著した「大西西泰利先生行蹟」の中に「越明年癸未(一五八三年)、利子始同羅子入端州(今肇慶府)。新制臺郭公、並太守王公(諱潘、浙紹興人)甚喜款留、遂築室以居。利子間制地圖渾天儀地球考時暑惜時之具、以贈當道、皆奇而喜、方知利子爲有德多聞高士也。」とあり、而して此の圖の刊行の時は西紀一五八四年であることは既にパツドレー氏が利氏の書翰の調査によつて明かにされた所である。然し此の圖は現存するか否か不明である。

(二) 南京版

次に上に引用した利氏の自序の續きに「庚子(一六〇〇年)至白下(南京)、蒙左海吳先生之教、

再爲修訂」云々とあり、一六〇二年版利氏世界圖中の吳左海の序にも「利山人自歐羅巴入中國、著山海輿地全圖、薦紳多傳之。余訪其所爲圖」云々とあり、又艾儒略も「大司徒吳公左海者、諱中明、歙縣人」、亦交利子。見坤輿圖而悅之。因請利子、更爲攻詳。出吏部公帑、重梓以廣其傳、且序辨焉。」(利西泰行蹟)と記してゐる如く、一六〇〇年には南京にて吳中明が利氏世界圖を官費にて出版したのである。此の圖も未だ現存するものを聞かないが萬曆甲寅(一六一四年)八月に錢希言の刊行した「猗園」第四仙幻、利瑪竇の條に「往嘗刻廣輿地圖於金陵。用五色以別五方、中華幅員大如彈丸黑子」云々とあり、又馮應京原著、載任增釋の「月令廣義」(一六〇一年著、一六〇二年春刊行)に利氏の「山海輿地全圖」及其の圖說等を載せてゐるが此等に據つて僅に南京版利氏世界圖の形を覗ふことが出来るのみである。^(四)

(三) 李之藻版

上に引用した、一六〇二年版利氏世界圖の序

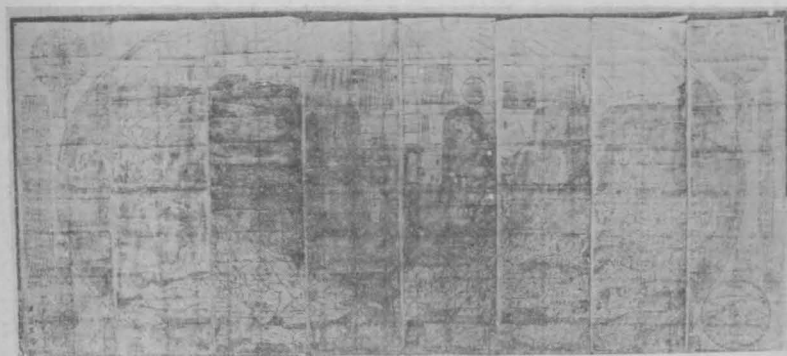
利瑪竇の世界地圖に就いて

に續いて「辛丑(一六〇一年)來京。諸太先生曾見足圖者、多不鄙棄羈而辱厚待焉。繕部我存李先生夙志輿地之學、自爲諸生編輯有書。深賞此圖以爲地度之上應天躔乃萬世不可易之法、又且窮理極數孜孜盡年不捨、歎前刻之隘狹未盡西來之原圖什一、謀更恢廣之。」云々とあり、此の度は多くの資料に據つて舊譯の謬を正し、圖幅を廓大した爲に國名、土產等大いに増補することが出来たことを述べてゐる。此の序文は「萬曆壬寅(一六〇二年)孟秋吉旦」の日附あるもので、我が京都帝國大學や宮城縣立圖書館に所藏されるものである。

尙、此の時この版本の彫刻者は私に全く同じ木版を彫つたので、こゝに同時に二組の李之藻版利氏世界圖が出来たことは利瑪竇の手記に見ゆる所で、既にバッドレー氏や洪氏によつて注意されてゐる。^(五)

(四) 馮應京、李應試版

北京に於ける利氏の世界圖は右の如く二組同



時に出来たのであつたが、此の珍本の需要を充すことが出来なかつたので、引續き更に、教徒 Li Paulo なる者が、八枚組世界圖を印刷したことは、やはり利氏の郷里に報じたる手記に見える前掲バッドレイ氏の論文中にも英譯された所である。此の圖は從來研究者が原本を見ることが出来なかつたので、數個の論議を生んだのであつた。然るに最近筆者は朝鮮、黃炳仁君の家藏なる、八枚組利氏世界圖(木板刷)を調査する機會を與へられ始めて現存する Li Paulo 版利氏世界圖原本「兩儀玄覽圖」なるものを知ることが出来た。

此の圖に據れば最近(昭和十一年四月)燕京大學史學科教授洪煥蓮氏の苦心の論證になる此の圖開版の時「一六〇六年」は萬曆癸卯(三十一年)西紀一六〇三年と訂正を要することとなる。而も亦洪氏の想定された馮應京主宰の利氏世界圖「一六〇一」は李應試(葆瑋)刻本とは別本でなく、寧ろ、馮・李協力製作と見るべき一本であることが明かになつた。

此の「兩儀玄覽圖」と李之藻の「坤輿萬國全圖」(一六〇二年版)との主なる相違は後者が六枚一組であるに對し、前者は八枚一組の大形であること、圖中の序や跋が吳中明のそれを除く全部が異なることである。

(五) 李之藻本再版

筆者はかつて、注意したことがある、が艾儒略の「職方外紀」に載せた李之藻の序文「天啓癸亥、一六二三年記」に「萬曆辛丑利氏來賓、余從寮友數輩訪之。其壁間懸有大地全圖、畫線分度甚悉。利氏曰、此吾西來路程也、其山川形勝土俗之詳、別有鉅冊、已藉手進大內矣。因爲余說、地以小圓處天大圓中。——中略——余依法測驗、良然。迺悟唐人畫方分里、其術尙疎、遂爲譯以華文、刻爲萬國屏風。居久之、有瀆呈御覽者、旋奉定案、因其版已携而南、中貴人翻刻以應。」云々とあつて、此のことは利氏の手記に據れば西紀一六〇八年のことであり、李之藻の一六〇二年版の彫刻者私造板の破損を補つた萬曆壬寅版の再版と見るべきものであることは既にバッドレー氏の注意せられた所である。

(六) 清朝版

しばしばふれるバッドレー氏の論文は、英國王立地理協會所藏の利氏世界圖から端を發した

利瑪竇の世界地圖に就いて

ものであるが、バッドレー氏は漢字が讀めないもので、専ら此の圖の形式の上から、伊太利ヴァティカンに在る一六〇二年版利氏世界圖と比較し、又我々の容易に接することの出來ない利氏の手記に據つて、此れが一六〇二年版であると考へたのであるが、此れは、其の翌年（一九一八年）ライオネル・チャイルス氏によつて英譯された際に、清朝になつてから、李之藻版が再版されたものであらうと云ふ注意がなされた。其の理由は一六〇二年版圖には支那の國名が「大明一統」とあり、今の黃海の邊りが「大明海」とあるに對し、英國王立地理協會所藏の利氏世界圖は「大清一統」「大清海」とあると云ふのである。此れだけの相違では「明」を「清」と削改したのではなからうかと云ふ疑問も起り得やう。然し、チャイルス氏の英譯に據ると、第二幅の下部にある「總論横度里分」の表中に理論上いづれも（二個所）五五の數字となるべき所が五六と五三に、五二となるべき所が五五に、三五とな

るべき所が五五となつて、合計四個の誤りがあることが注意されて居り、我が京都帝大所蔵の利氏世界圖にはチャイルス氏が假りに訂正された正しい數字が出てゐる。此の數字は政治的關係から何等の束縛を受ける性質のものではないから、明かに彫刻者の誤刻と見るべく、従つて右兩者は同一板木から出たものでなく、別板から印刷されたものであると推測され、恐らく、チャイルス氏も云はれる如く、順治帝が北京に都した西紀一六四四年以後に於いて、李之藻版利氏世界圖の修訂刊行されたものと見ることに出来る。

(七) 倣刻本の種々

上述の正出利氏世界圖の外に倣刻本の種々があることも序に注意して置かう。

先づ、艾儒略が「利子向在端州時、晝有坤輿圖一幅、爲心堂趙公所得、公喜而勒之石、且加辯語焉、然而尙知利子也。」(利西泰先生行蹟)と述べ、又利氏の書翰にも此の話が見えるさう

であるから、この事は事實と見て差支なからう。即ち此の圖は肇慶の利氏世界圖を蘇州にて趙可懷なる者が石に勒したもので、このことに就いて、洪氏は利瑪竇の支那巡遊の足跡から見て大體萬曆廿三年より同廿六年(一五九五)の頃のことであらうと推定される。

其他、此頃、南昌に在つた利氏が建安王に地圖を贈呈したことや又其れに類する話が彼の手記に見えるさうであるが、板木に彫刻されたものであるかどうかは明かでない。

次に、洪教授は利氏の「入華記錄」に「貴州巡撫 Cuocin 者、利神甫在廣東時已與相識。此君竟於貴州得此本世界地圖之一。彼遂縮小其圖以爲一書、並依利神甫之分世界爲五州而亦以五部分列各國、擊注辭焉。」云々とあるに據り、此の Cuocin は萬斯同の「明史稿」中に傳ある郭子章であることを考證せられ、更に北平圖書館所蔵の「黔草」なる書中にある郭子章の「山海輿地全圖序」に「予因其圖大、不便觀覽(覽)、乃規

而小之爲冊、而圖中細說分注於左。」云々などあるに據り、バッドレー氏の注意にも上つた此の書を「山海輿地全圖、萬曆卅二年、1604、郭子章刻版、貴州、縮刻吳中明本」として、利氏世界圖刊行年表に容れられた。

以上に據つて、結局、洪教授の「考利瑪竇的世界地圖」なる論文中に掲げられた勞作、利氏世界圖作製年表は左の如く補訂さるべきではなからうかと思ふ。

山海輿地圖	萬曆十二年 (一五八四)	王泮刻版	肇慶
(世界圖誌?)	萬曆廿三年 (一五九五)	南昌 繪贈建安 王多櫛	
山海輿地圖	萬曆廿三・六年 (一五九五)	趙可懷勒石	蘇州 翻王泮本
(世界圖記?)	萬曆廿四年 (一五九六)	南昌 爲王佐編 繪得一或	南昌 二本
(世界地圖?)	萬曆廿八年 (一六〇〇)	吳中明刻板	南京 增訂王泮本
山海輿地全圖	萬曆三十年 (一六〇二)	李之藻刻板	北京 增訂吳中 明本
坤輿萬國全圖	萬曆三十年 (一六〇二)	刻工葉刻板	北京 複刻李之 藻本
坤輿萬國全圖			

利瑪竇の世界地圖に就いて

兩儀玄覽圖	萬曆三十一年 (一六〇三)	馮應京等刻板	北京 改刻李之 藻本
山海輿地全圖	萬曆三十二年 (一六〇四)	郭子章刻版	貴州 縮刻吳中 明本
坤輿萬國全圖	萬曆三十六年 (一六〇八)	諸太監摹 繪李之藻本	北京
坤輿萬國全圖	西曆一六四四 以後?		改刻李之 藻本

勿論、此の外にも原著者利瑪竇の知ると知らざると種々なる利氏世界圖の縮印、倣刻等々のあるであらうことは既に諸先學も注意された所であるから、今後、上の表も漸次補訂さるべきものである。

三、利氏世界圖の特徴

上に見た如き由來を持つ利瑪竇の世界圖は少くとも現に我等が見得るものはいづれも極めて興味ある多くの特徴を備へた世界地圖である。こゝでは、たまたま去る四月(昭和十一年)支那の禹貢學會にて雜誌「禹貢」(五ノ三・四合期)を「利瑪竇世界地圖專號」とし、附録として我が京都帝大所藏の利氏世界圖(一六〇二年版)を影印

したので、容易に原形を覗ふことが出来るから、主として一六〇二年版圖に據つて、其の特色を見よう。

此の世界圖は全體を六幅に分けて、その一幅は長さが約五尺六寸、幅が二尺ある。

楕圓五大洲の欄外には一面に天文學的註記があり、第六幅には日月蝕圖と地球の南北極を中心にした半球圖が上下に相對してゐる。

此れは「地形本圓球、今圖爲平面、其理難于一覽而悟、則又倣敝邑之法、再作半球圖者二焉」とあるによつて其の存在の意義を知ることが出来る。其他、第一幅には「九重天圖」及「天地儀」の圖があつて、各々説明文を伴つてゐる。更に圖中の空地を利用して、「總論横度里分」(第二幅)、「太陽出入赤道緯度」(第五幅)等の仔細な度數表がある。

此等は總て、その世界圖内容の了解を容易ならしめる爲に附記されたものである。

五大洲はもと「各州之界當以五色別之今其便

覽」とあるに據れば、五洲色別けせられたものらしいが現存圖には色彩あるものを見ない。次に第一幅上部欄外に「天下五總大州用朱字、萬國大小不齋略以字之大小別之。其南北極二線晝夜平三線關天下分帶之界亦用朱字」とあるが、右に注意された朱字朱線は現存圖に見出すことは出来ない。たゞ萬國の大小を文字の大小に比例せしめたことは首肯されるやうである。利氏はこの萬曆壬寅版の序文に「增國名數百、隨其楮幅之空載厥國俗土產。」と云つてゐる通り、此の一例を舉ぐれば

「南亞墨利加、今分爲五邦、一曰孛露、以孛露河爲名、二曰金加西蠟、以所產金銀之甚多爲名、三曰坡巴牙那、以大都爲名、四曰智里、古名、五曰伯西兒、即中國所謂蘇木也、其至南又有巴大溫地方、其人長八尺、故謂之長人國。皆無文字、以結繩爲治。」

とある如く、この世界圖には非常に多くの地誌的註記がある。其上更に餘白を利用して利瑪

寶自身の序文や彼の交友であつた、吳中明・李之藻・楊景淳・祁光宗・陳民志（以上は一六〇二年版）馮應京・阮泰元・李應試・拱宸・棠胤緒（以上は一六〇三年版）等の序や跋、又は利氏の著にかゝる「四行論略」乾坤體義⁽¹⁾其他「元史」（卷五十二、志第四、曆一「晝夜刻」）等の書を引用し、或はこの世界圖の由來を語り、或はこの世界圖を權威づけてゐる。

此の世界圖の製法や圖形や又國俗註記の亞細亞の部を除く大體は當時西洋に行はれてゐた。Abraham Ortelius の一五七〇年出版にかゝる「Theatrum Orbis Terrarum」や Gerardus Mercator の著した世界圖⁽²⁾殊に「Orbisterrarum Compendiosa descriptio」(1587) または Peter Plancius の「Nova et exacta Terrarum Orbis tabule Geographica ac Hydrographica」(1592) 等が參考されて出來たものであらう事は前掲バッドレーやウツドやチャイルス等諸氏の研究によつて知り得る所である。⁽³⁾

利瑪竇の世界地圖に就いて

然し東洋方面の圖形、國俗註記は利氏も、「取通誌諸書、重爲攻定訂」（一六〇二年版圖自序）と云つてゐる通り、左に示す如く「新五代史」や「隋書」から其の資料を拾つてゐることは明かである。

(1)「地嚴寒、水出大魚、又多黑白黃貂鼠、其人最勇。」（利氏世界圖第四幅地豆于地方註記）

「地苦寒、水出大魚、契丹仰食、又黑白黃貂鼠皮、北方諸國皆仰足、其人最勇。」（新五代史卷七十三、四夷附錄二）

(2)「人身牛足、水曰瓠蘆河、夏秋水厚二尺、春冬水澈底。常燒器消氷、乃得飲。」（利氏世界圖、第四幅、牛蹄突厥地方註記）

「牛蹄突厥、人身牛足、其地尤寒、水曰瓠蘆河、夏秋水厚二尺、春冬水澈底、常燒器消氷、乃得飲。」（新五代史卷七十三、四夷附錄二）

(3)「其人髡首、披皮爲衣。不鞍而騎、善射、遇人輒殺、而生食其肉。其國三面皆室韋。」（利氏世界圖、第四幅、韃靼子國註記）

「東北牛蹄突厥之東北至韃靼子、其人毛首、披布爲衣。不鞍而騎、大弓長箭尤善射。遇人輒殺、而生食其肉、契丹等國畏之、契丹五騎遇一韃靼子、則皆散走。其國三面皆室韋。」（新五代史卷七十三、四夷附錄二）

(4)「此地多積雪、人騎木而行、以防坑陷。捕貂爲業、衣魚皮。」

(利氏世界圖、第四幅、室韋國註記)

「地多積雪、懼陷坑絆、騎木而行、俗皆捕貂爲業。」(附書卷八十四、列傳北室韋)

日本國に記入された五十餘ヶ國名は胡宗憲の「籌海圖編」に在る日本圖の國名と大體同じ順序であり、攝津の隣に攝摩と云ふ國名が記るされてゐるが此れも兩圖共に同様である。利氏世界圖中の日本圖は恐らく「籌海圖編」或は此と同系の日本圖に據つたものであらう。利氏圖には南海道(四國)に伊紀と云ふ國名があるが、此れは「宋史」日本傳にも出てゐるから、かゝる誤りが支那では普通になつてゐたので、必ずしも作者利瑪竇の誤りと云ふべきものではなからう。

要するに利氏の世界圖は當時西洋に行はれてゐた世界地理知識が基となり、其れに利氏自らの新知識——自身の實驗觀察、又は李之藻等によつて提供された支那側の資料——或は彼の實踐的立場から原圖には無い獨特の註記が施され、更に天文學的、宇宙論的註記と他書引用によつて

天圓地方の世界觀を固守する支那人に紹介する世界圖としての役目を一層有効ならしめたものであると云ふことが出來よう。

右の如き内容と形式とをもつ利氏世界圖を見て我々が第一に想起することは其の全體的構造の特徴である。即ち此の世界圖は哲學・宗教・天文・曆法・自然地理・人文地理・民俗傳説等の記述が雜然と記るされ、其上、序文や跋文まで備つてゐる。表題を見れば世界地圖が主體であるに相違ないが、此れを單なる世界地圖として看過することは出來ない。

時代の發展と共に世界知識が正確且つ詳細になつて、地圖と地理的説明とは自ら分離する。利氏の世界圖は分離してゐない所に特色がある。利氏世界圖の出來た第十七世紀の初期と云へば西洋の歴史は所謂中世から近世への過渡期に屬する。かゝる時代の特徴は世界圖にも現はれ、その内容には中世的な風土記的、傳説的記述や地圖と、此れとは全く矛盾するかの如き近

世的、科學的な記述或は地圖とが並び存するのである。

第二に利氏世界圖に記るされた世界各地產物に就いて其の特徴を見ると、第一に金銀、第二に寶石類、第三に香料、第四に獸類、第五穀類、魚類鳥蟲類、第六酒類、第七漆器・布鐵と云ふ順序である。此等は大體に於いて、當時西洋の貿易船の關心を持つ物產の順序を現はすものと見てよからう。

第三に忘れてならないことは利氏世界圖は耶蘇教布教手段として作製されたものであることである。即ち利氏は自らの目的を遂行する爲には、支那の本土から追放されてはならない。その爲に、又一面理解を易からしめる爲に彼の地圖は西洋の原圖と異つて、支那が中央に置かれてゐる。そして第二段として表現を許される最高限度の耶蘇教的要素を加味した。前にも述べた天文學的記述に於いては、天の廣大なるに比して地球の微小なることを云ひ、此の廣大なる

宇宙を主宰する神(天主)の存在を想はせやうと努力してゐる。

此等は作者の社會的立場から現れた利氏世界圖の特質である。

四、利氏世界圖の影響

上述の如き形體と性質を持つ利氏世界圖の東洋史上に及した影響は種々の方面に就いて觀ることが出來よう。こゝでは前掲「地理學研究」(一〇の二・三・四)に述べた拙稿との重複を避け、其後の書誌學的調査によつて得たものゝみを舉げて、其の世界地理學史上に及す影響の尠なからざる有様の推察を乞ふこととする。

南京版利氏世界圖は前にも言及した如く、萬曆壬寅(一六〇二)春の序ある載任増釋の「月令廣義」(首卷廿六丁)に「九重天圖」を引き、其の下に「此圖即大西國之文也、見後圖說」とし圖說には「利西江云、余嘗留心量天地法、從大西洋天文諸士討論已久、茲述名數以便覽。」と述べ、

利氏世界圖李之藻版の第六幅、李應試版第八幅又は「乾坤體義」上卷に見られる「或問地球比九重天之星遠大幾何」の説明が引用されてゐる。

次に此書圖説の卷には其の開卷第一に利氏世界圖に見られる「天地儀」の圖が載せられ其の下に「利山人山海地輿圖」云々と記し、又「山海輿地全圖」(首卷七二丁)があり、此れに關する吳中明の撰した序文並に「大西國山人利瑪竇譯」の「山海輿地全圖説」が引用せられて、此の「月令廣義」なる書に利氏の世界圖が大に利用され、幾多の影響あることを物語つてゐる。

此の「月令廣義」中の利氏世界地理の系統を引くものとして注意されるものに萬曆三十七年(一六〇九)王圻の編纂になる「三才圖會」がある。「三才圖會」には「山海輿地全圖」があり、他に「天地儀」の圖もある。然し「月令廣義」に記るされた吳中明の序は此書には缺く所となり、山海輿地圖説は「月令廣義」のそれと比して二三文字の脱落と更にその撰者利瑪竇の名を缺き、

その由つて來る所を不明ならしめるが、此れが「月令廣義」から其儘採つたものであることは一見して明かである。

其他明末、前記馮應京等の別著「方輿勝略」(一六〇九年刊)にも利氏世界圖(兩半球圖)が載せられ、此れが更に潘光祖の輯した「輿圖備考」中に「經度圖」の名を持つて容れられて居り、又別に章潢の編纂になる「圖書編」に利氏世界圖の影響が現れて居る等、此の類は他にも尠くはなからう。

清朝になつてからのものでは康熙二年、姑蘇王君甫發行の「大明九邊萬國人跡路程全圖」があり、此圖は支那人の中華思想をよく現したもので、支那を中央に廣大に描きその周圍に諸外國を附けたのであるが、而も利瑪竇の云ふ世界(五大洲)を頗る狹少なるものに描いてはゐるが其の存在を認めてゐる點に興味を感じる。

次に刊行の時を明かに知り難いが清の游子六の輯した「天經或問」は其の引用書目に利瑪竇、

艾儒略其他耶蘇會士の著述に係る諸書を多く記して、その所説には利氏等の天文地理説を利用する所が多い。そして、同書「序圖」の卷に「大地球諸國全圖」と記した世界圖を容れてゐる。此の圖は同書引用書目にも前に見た「月令廣義」の名が記るされてゐる所から見るとやはり「月令廣義」の其れを引用したものと考へられ、此れ亦南京版利氏世界圖の影響下に在るものと見ることが出来る。かくして、支那に於ける初期世界圖の現存するものは殆ど全部利氏世界圖の影響を受けたものであると云ふことが出来る。尙、此の外に利氏世界圖中の説明文の影響も看逃し難いものがある。

先づ、「明史」(三百廿六卷、列傳二百十四、外國傳六意大里亞の條)に「意大里亞、居大西洋中、自古不通中國、萬曆時其國人利瑪竇至京師、爲萬國全圖、言天下有五大洲。」云々と記して、こゝにも利氏の紹介に係る五大洲が問題になつてゐる。

「明史」の此の記事はやがて乾隆六十年(一七九五)趙翼の「廿二史劄記」(卷三十四、天主教の條)に引用せられて廣く讀まれたのである。更に降つて、特に注目すべきものに魏源の編輯した「海國圖志」がある。「海國圖志」は知らるゝ如く、阿片戦争の中心人物たる林則徐の翻譯した「四洲志」を魏源が増補して道光二十二年(一八四二)に六十卷本を、又咸豐二年(一八五二)には百卷本を出したもので、近世東洋に於ける世界地理書中、白眉の稱あるものである。

此の書に記す咸豐二年の魏源の後叙には「譚西洋輿地者、始於明萬曆中泰西人利瑪竇之坤輿圖說艾儒略之職方外紀。」云々と記し、彼等の西洋地理創闢の功を擧げ、而して本論にては卷七十五、國地總論(中)に「利瑪竇及艾儒略二西士記」として、此の卷全部が利艾二氏の所説に當てられてゐる。其の中利瑪竇の記す所と云ふのは「利瑪竇地圖說」の見出しにて利氏世界圖一六〇二年版(或は一六〇三年版)第一幅の圖説を全

部收録したものである。又卷七十四、國地總論上「釋五大洲」の條には「梵典分大地、爲四大洲西洋圖說得其二焉、而強割爲五爲四、考萬曆中利瑪竇所繪萬國地圖及國朝南懷仁之坤輿圖說與天啓中艾儒略之職方外紀、國者、以地爲圓體、故分前後二圖。」云々と述べられてゐるが、此等は此の十九世紀の半ばに入つても猶地球々形、五大洲等を論ずる爲に重要な參考書として利氏世界圖が利用されてゐることを物語るものであらう。

かくして、利氏世界圖は支那人に對して、地球の球形なることを教へ、五大洲なるものを知らしめ、その間に於ける支那の位置、範圍を明かにして、彼等の世界觀を革新し、更に又地球の五帶を論じて氣候の差異ある理を説き、此等の學問の發達した歐洲諸國の文明の有様を傳へ尊大なる支那人の思想を變革し、進んで天主に歸依する者を増加せしめると云ふ役目を果たした。其の一面又支那に於ける地圖製作技術を指

導して地理に關する新知識を傳へたのと同時に製圖の新方法、新様式をも傳へたのであつた。殊に利氏世界圖に於ける世界各地の地名の漢字譯等は此の方面の基本となるもので、今に至つて使用されるものが頗る多い。

次に、利瑪竇の支那に紹介した世界地圖は我國にも傳入し、江戸鎖國時代の世界地理知識の原泉となり、支那に於けると同様の影響を及してゐる。

秋岡武次郎教授がその「地圖學史」(岩波地理學講座所收)に利瑪竇世界圖の影響下に在るものとして挙げられた、我國に於ける初期印行世界圖は大體正保から正徳の頃までに約二十種類を算する。

江戸一世の曆算家として知られる安井算哲の世界知識も利瑪竇の世界圖から來たものであることは、享保六年、其の門弟、仙臺藩士春水子(入間川市十郎)の誌した「春海先生實記」(日本教育史資料九)に「又以歐羅巴利瑪竇所著之坤輿萬國

横圖乃畫屏六幅。縮畫一圓球縱橫象天度及里方。號曰

地球。是亦便于學地理。且制我國之地圖合天度而定方位。別爲深祕之一圖前代所未曾有之畫而本朝第一之至寶也」と

あり、又「先生〔算哲〕所製之天器頗多而最貴重者。乃天球也。地球也。新製渾天儀也。日本天文分野圖也。大日本地圖也。利瑪竇所畫之渾天儀萬地之圖也。」云々とあるに依つて明かであらう。現に伊勢、神宮文庫に在る算哲所製の「地球儀」と「天球儀」、獨逸、ライプツヒ市立、グランツ博物館に在る算啓自筆の世界圖(七)（寛文庚戌秋安井算哲謹記焉の序がある）は皆利瑪竇の世界圖に據つて作られたものであることは人々の認むる所である。

次に我國最初の世界地理書と云はれる新井白石の「西洋紀聞」(八)「采覽異言」に利氏世界圖の影響の多いことは此の書を一見して知らるゝ所である。

原目貞清の世界圖(九)（一七二〇年刊）長久保赤水の「山海輿地全圖」(一〇)（一七八二年初版）、さては稻

垣子哉の「坤輿全圖說」(一一)（一八〇二刊）山村昌永の「増譯采覽異言」(一二)（一八〇二年誌）等々其の影響は頗る多い。

江戸時代の世界地理學は中期以後、蘭學の興隆に依つて、直接歐洲より新知識の輸入があり、利氏等の紹介になる近世初期の知識は影をひそむるかと思はるに、さうでなく、實は此等と併行して幕末まで其の命脈を保つことあたかも江戸時代中期以後に及んで町人の勢力が擡頭しつつ、而も尙武家政治が行はれてゐると同様である。

尙、利氏世界圖の影響は尠くなからうが、支那のものに就いては陳觀勝氏の「前掲論文」、我國地理學史上の利氏世界圖に就いては岩波講座、地理學中の

秋岡武次郎氏著「地圖學史」

村松繁樹氏著「日本地理學史」

藤田元春氏著「江戸時代に於ける我國地理學の發達」や藤田元春氏の別著「日本地理學史」等見るべき研究が多いので筆者の贅言を避けるこ

ととしよう。

五、結 語

此の小論は初めに述べた如く、多くの誤りを含む前掲の拙稿に對する自責の念に追はれて記したもので、結局、劈頭に擧げた諸先生の雄篇の後塵を拜したに止まる。尙利氏の世界圖が我國に及したる影響に就いても不備なる前稿——此の點は本稿もさうである——は補訂の要が尠くないが、此れは機會を得て稿を改めたいと希つてゐる。(昭和一一・八・一〇記)

(一) 此の書はもと佛蘭西巴里國立圖書館所藏のもので、今筆者の見るものは齋藤清太郎氏が此れを謄寫し更に中山久四郎教授が「利瑪竇傳續篇」(歴史地理二九ノ三・五)中に其の全文を載せたものである。以下「利西泰先生行蹟」と略記する。

(二) 以下しばしば引出されるバッドレー氏の論文は、前掲和田清先生の論文に大體は紹介されてゐるから参照せられたい。

(三) 始め、伊太利、ミラノ、アンブロジーオ圖書館にある支那製世界圖が、利氏自傳の刊行者タツシ・ヴェントウリ師

に據つて、此の華嚴版世界圖であらうと云はれたのであるが、此れは、艾儒略の「職方外紀」に載せられた萬國全圖であらうと推定される學者が多い。前掲、小川琢治氏、洪煥蓮氏の論文、及秋岡武次郎氏著「地圖學史」(岩波地理學講座所收)等を参照せられたい。

(四) 拙稿「明末清初耶蘇會士が支那に紹介した 界地理書に就いて」(日本大學文學科研究年報第三輯史學科の部、昭和十一年五月刊)参照。

(五) いづれも前に擧げた論文の中に述べられてゐる。

(六) 此の圖に就いて、別に「利瑪竇の兩儀玄覽圖に就いて」なる小論を草したから、近く高教を仰ぐことが出来よう。

(七) 拙稿「艾儒略の職方外紀に就いて」(地球二三ノ五)参照。

(八) 洪氏の前掲論文(禹貢五ノ三・四合期)参照。

(九) 洪氏の漢譯したものである。前掲論文参照。

(一〇) 前掲拙稿(日本大學文學科研究年報第三輯)参照。

(一一) 利氏世界圖の原圖に關する世界圖に就いては種々の説がある。前掲秋岡武次郎氏「地圖學史」参照。

(一二) 「方輿勝略」所載の世界圖は洪氏の前掲論文に「經度圖」は秋岡武次郎先生の「地圖學史」中に載せられてゐる。

(一三) 拙稿「月令廣義所載の山海輿地全圖と其の系統」(地理學評論、昭和十一年十月號に掲載される筈)参照。

(一四) 「天經或問」は享保年間西川如見の子、正休によつて

翻刻され、明治になるまで此の方面に利用されてゐる。

(二五) 拙稿「利瑪竇の世界圖に關する歴史的硏究」(地理學硏究一〇ノ二・三・四) 參照。

(二六) 深澤鍾吉氏「元祿年間の地球儀と天球儀」(歴史地理一六ノ一) 參照。

(二七) 「歴史地理」一七ノ四 口繪參照。

(二八) 藤田元春氏著「日本地理學史」及、拙稿「新井白石が西洋紀聞及采覽異言を著すに參考した利瑪竇の世界圖に就

いて」(地理學硏究九ノ一〇) 參照。
(一九) 秋岡武次郎氏著「地圖學史」所載。東北帝大圖書館に藏せられる。

(二〇) 西田與四郎氏「長久保赤水の地圖に就きて」(史學雜誌三一ノ五)

(二一) 拙稿「稻垣子儀の譯した坤輿全圖說に就いて」(地球(二一ノ一) 參照。

ナウマン氏小話、フォッサマグナ、贊川風景

佐川榮次郎

エドムント・ナウマン博士 Dr. Edmund Naumann はドイツ、ザクセン國、マイセンの人、一八五四年九月十一日に生れ、一八七四年ミュンヘン大學より學位を得、翌年明治八年日本政府の招聘を受けて來朝、東京大學教師となつた。三年間地質及鑛山の學生に地質・鑛物・

採鑛の學を教へた。其時の學生には地質の方には巨智部・山下・西の諸氏の級と富士谷氏の級とがあつた。明治十一年内務省地理局内に地質課が出来て氏は其方に移り和田維四郎氏と共に地質調査事業の創立事務に關與した。翌年には其の準備のために歐米に旅行、十三年(一八八